

□ ■ INDEX □ ■

- 1 ニセブランド品
- 2 高橋弘のモルモン人物伝 (10)
アメリカ大統領候補、ミット・ロムニー
- 3 リアホナを斬る (第12回) 木塚灯八
2007年4月号 大管長会メッセージ 「結婚生活を豊かにする」
- 4 思い出す 私と勇気と真実の会 (2) るう
会の設立
- 5 おしらせ

■ ニセブランド品

とあるSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)での話した。正統キリスト教会の自称牧師(姓名や牧会する教会さえ隠蔽している)が教会内にはびこるカルト的体質について意見交換するコミュニティを運営している。興味があったので覗いて見た。すると、「教会で仲間の信徒からイジメを受けた」「牧師からイヤミを言われた」とか「説教でコーヒーを飲んではいけないと言われた」などなどの投稿があった。そこはこうしたことを取り上げて、これがカルトかどうかを議論していたのだ。

こうしたことはカルトグループの中ではあることである。しかしもちろん、これがあるから即カルトだということではない。必ずカルトに発展してゆくというものでもない。逆に恐れを今現在感じているなら、自ら処置しようがあるだろう。本当のカルトにいた場合、イヤミも嫌がらせも麻痺してしまって、そうとは感じられなくなってしまう。全部が自分の信仰、信心の足りなさと言うことにすり替えられて、自分を責めて、自らを壊していつてしまう。イヤミ、嫌がらせと受け止めれるうちはむしろ健全といえる。そこからは自分の意思で解決する手段がある。極端な話し、棄教するなり、他の教会に行けば良いのである。と言うよりも、むしろ、当事者同士腹を割って話せば解決することがほとんどだ。

この自称牧師はカルト、異端やマインド・コントロールについてまともに学習も研究もしていないことは明白だ。では、彼はいったい何をしたいのだろうか、と考えてみた。ネットでもっとも閉鎖的なSNSという空間と、ネットの匿名性も利用して、「カルト被害者たち」を身近に集めて、自尊心を満たしているだけなのだ、と言う結論に着いた。反カルトの活動をしている人たちを私たちはたくさん知っている。ほとんどが、真面目に真剣に取り組んでいる。そして、その多くが元カルトのメンバーである。おかげでカルト問題について社会の認識も高まって来た。それはすばらしいことだ。しかし、その一方で「反カルト」がブランドとなって来ているのだろう。そして、ブランドの模造品が出回り始めている。駆逐されないよう、良貨は悪貨とも戦っていかねばならない。

□ 高橋弘のモルモン人物伝 (10)
アメリカ大統領候補、ミット・ロムニー

アメリカ大統領候補、ミット・ロムニーについて

ミット・ロムニーは、2008年度の大統領選挙へ共和党から出馬表明をし、現在のところ予備選挙ではジュリアーニ、マケイン、ギングリッチに次いで4位につけていく。ロムニーとはいかなる人物なのか、モルモン教との関係、大統領に選ばれる可能性について、簡単に紹介しておきたい。

ウィラード・ミット・ロムニー(本名)は1947年3月ミシガン州の生まれで丁度60歳になったばかりだ。大学教育のためにわざわざブリガム・ヤング大学を選んだことから分かるように、ロムニーの家族は熱心なモルモン一家である。在学中にフランスに2年間宣教師として出かけたが、ときまさにヴェトナム戦争真っ最中でフランスでは歓迎されなかった。その後ハーヴァード大学法科大学院で法学を修め優秀な成績で卒業、同時にMBAの資格を取っている。1978年からコンサルタント会社ベイン&カンパニー社副社長、1991年から同社CEO兼会長。また1984年から自らが創った投資会社ベイン・キャピタル社のCEO兼理事を務めている。ドミノ・ピザはここから資金を得て全国的な会社へと成長した。

1994年、マサチューセッツ州の上院議員の座をエドワード・ケネディー(前ジョン・F・ケネディー大統領の実弟)と競い敗北。ロムニーはまた、ソルトレーク冬季オリンピックの誘致をめぐるスキャンダルが発覚したときに(註1)、その汚染されたイメージのクリーン・アップのために白羽の矢をたてられ、オリンピックの実行委員長として資金集めを初めとする問題を見事に解決し、一躍全米にその名を知られることになった。2002年同州知事となり一期4年勤め、今回の大統領選挙出馬を表明した。マサチューセッツ州の財政を建て直し、増税をせずに皆保険制度を導入し、雇用を拡大して失業率を下げるなど、有能な知事としての州民から愛される存在であった。その後、全米知事会の会長にも推薦されている。マサチューセッツの人々がロムニーを知事に選んだのは州の

とである。

ロムニーのことを語るには、その父親であるジョージ・W・ロムニーを語らないわけにはいかないだろう。ジョージ・ロムニーは十一献金（百分の一）を欠かさぬ熱心なモルモン教徒であったに留まらず、ビジネスマン、政治家としても成功を修めた人物であった。ビジネスマンとしてはGMと方を並べる今は無きアメリカン・モーターズ社を再建させた人物であり、それによって巨万の富を築いた。また政治家としては1954~1966年まで3期12年間ミンガン州知事を務め、1968年共和党から大統領候補として出馬した経験がある。結局、ニクソンが大統領になり、ジョージ・ロムニーはニクソン政権の住宅都市開発省長官を務めた経験をもつ。

したがって、その子であるミット・ロムニーは裕福で毛並みのよい生まれなのである。

モルモン教との関係

ロムニー一家は熱心なモルモン一家であることはすでに触れた。父親であるジョージ・W・ロムニーはビショップであったし、十一献金を欠かしたことはないと言っていた。ロムニーについて最大の問題は、やはり、モルモン教会の歴史と深く関係している。それは、まず、父親であるジョージ・W・ロムニーがメキシコのチワワで1907年に誕生したと関係している。モルモンの歴史に詳しい方ならすでに察しがついたであろうが、メキシコのチワワは、モルモン教徒たちが非合法な多妻婚を継続するために海外につくったモルモンのコロニーの一つである。アメリカの国内向けには、1990年、当時の大管長ウッドラフが神からの啓示を受けたという理由で多妻婚の廃止宣言をし、モルモンはアメリカ憲法を遵守することを決定した。しかし、それはアメリカ政府を欺くためのかモフラージュであった。実際にはモルモンの指導者は率先して多妻婚を続ける方法を模索しており、その一つがメキシコでのコロニー設立だったのである。ジョージ・W・ロムニーは多妻婚から生まれた子どもだったのである。しかも、完全に非合法的な性関係から生まれた子どもであって、その父親は重犯罪者であったわけである。

ただし、子どもには責任はないはずである。そのことで責任を問われるのは親であって子どもではないはずだ。しかしながら問題はそれほど単純ではない。なぜならロムニーはモルモン教の熱心な信徒であることによって、モルモン教会の信仰と深く結びついているからである。モルモン教会は、過去の反省を行っていない。つまり、(1)モルモン教会は百年近くにわたって続けられていた「多妻婚」はなかったと主張しているし(明白なウソと事実の隠蔽)、(2)予言者スミスの「多妻婚」の啓示をいまなお正典のなかに残しており(多妻婚の肯定)、そして(3)モルモン教徒の待ち望む彼岸の世界は「多妻婚」の世界である。神殿においてなされる「結び固め」の儀礼は、そうした多妻の世界への準備である(信仰の中核にまだ多妻婚がある)。ということは、モルモン教会はいまだに多妻婚を教義のなかに保持しており、多妻婚は否定していない。モルモン教会はこの問題をいまだ未解決のままである。だから、大統領候補になる人間は当然その人の宗教的立場を問われるし、それに対して応えねばならない立場にある。ロムニーはいずれ個人的な立場のみならず自分が信じているモルモン教のあり方を問われることになるだろう。この点ではロムニーは大きな汚点を抱えて闘わねばならないのである。

そして、ついであるが、モルモン教会が行ってきた過去の歴史について、政治家となったロムニーが問われることになる。すなわち、なぜモルモン教は黒人差別を続けてきたのか、なぜヴェトナム戦争を正しい戦争だと主張してきたのか、なぜブッシュを支持するのか、イラクの攻撃は正しかったのか、なぜアメリカのアラブ系住民を危険視するのか、等々である。そして、こうした問いに立たされるとときロムニーには弁解の余地がないのである。

大統領に選ばれる可能性

かつてモルモン教徒が大統領に選ばれたことはない。同じように、女性も大統領になったことはないが、黒人が、あるいはマイノリティが大統領になったことはない。唯一の例外は、ロムニーがマサチューセッツ州で上院の座を争ったケネディー家である。周知のようにケネディーはアイルランド・カトリックであった。保守的アメリカのなかで、アイルランド移民やさらにはカトリックに向けられた差別は半端ではなかった。ケネディー家の子どもたちも様々な偏見や差別と戦わねばならなかった。

ロムニーは、おそらくイギリス系移民の子どもとして、人種的なハンディを背負ってはいない。またモルモン教徒であるという点で、プラスとマイナスの評価を受けるだろう。プラス面としては、なによりも保守的な人間であり、アメリカに忠実であり、権威に従う人間として信頼が厚いことである。マイナス面は、先に述べたモルモン教会のもつ様々な問題にたいしての説明をロムニーに対して向けられていることである。たとえば「多妻婚」をどう思っているのか、である。すでにミット・ロムニーは多妻婚が違法であることを表明している。そうすることでロムニーは、彼の曾祖父である熱心な多妻婚主義者だった使徒パーリー・ブラッドや、同じく彼の曾祖父である熱心な多妻婚主義者だったマイルズ・ロムニーを否定しなければならなくなるだろう。そのことは同時に、モルモンの信仰の否定にもつながるのである。

私個人としては、ロムニー親子はやや保守的ではあるが、バランスの取れた実行力のある政治家であると思うが、しかし、裕福なビジネスマンでありこれまた熱心な共和党員であることによる限界が見えている。彼にはアメリカの90パーセントに上るすでに貧困な国民と貧困へ没落寸前の国民の苦しみは見えてはいない。これはなにもロムニーに限ったことではない。現大統領ジョージ・ブッシュがそのよい例である。それはまた前岸信介首相の孫である安部晋三が

の政治家にはなれないのと同じである。

おそらくロムニーは予備選挙中に出馬をやめるであろう。大統領になるチャンスはかなり低いはずだからだ。それはロムニーがモルモン教徒であるからというよりも、アメリカはいまの金持ちや企業を優先する方針に、また武力をもって海外に臨むブッシュ的、共和党的政治のありかたに、深く失望しているからである。

最後に、アメリカ人にとって宗教は大事であるが、ブッシュのキリスト教とロムニーのモルモン教の相違は、あまり違うようには見えないのであろう。アメリカ人の切実な関心事はお金であって、それ以外は意味を失いつつある。このことはモルモン教会にとっては福音であるに違いない。

註1 暴露されたのは、IOC委員一人当たり十萬ドルにも相当する金品の贈与、買春の斡旋、IOC委員が出身国で立候補した自治体首長選挙の選挙資金提供、土地転がしの利権供与、IOC委員家族の留学斡旋・就職斡旋、三流「芸術家」である有力IOC委員の子弟をソリストとして出演させるオーケストラコンサートの開催、家族・親族・友人まで含めた豪華な招待旅行、IOC委員出身国のスポーツ団体の資金やスポーツ用品提供と選手の国外研修斡旋など、ありとあらゆる買収工作だった。「『グローバル戦争』の下で始まった国家主義と偽善の祭典」より

<http://www.jrci.net/web/frame0218g.html>

■連載 リアホナを斬る (第12回) 木塚灯八
2007年4月号 大管長会メッセージ 「結婚生活を豊かにする」

モルモン教の結婚と言えば、世間一般の人にとってまず思い浮かぶ言葉は多妻結婚だと思います。もう少しモルモンの事情に詳しい人になれば、モルモン教会はすでに廃止しているが、ユタの山中には今でも一夫多妻制度を実施しているグループがあるらしい、と理解しているようです。多妻結婚はそれだけでモルモンに関する重要なテーマなのですがそれは別の機会に譲ります。今回は現在のモルモン教会でよく語られる「家族を大切にする」という点について考えます。

今回の話者、ジェームズ・E・ファウスト長老は説教の冒頭で、自分が弁護士だった頃、離婚の相談にやって来た女性が離婚後、何年もしてから出会ってみると離婚したことを後悔していると語った、と述べ、今後アメリカの女性の半数が離婚を経験するだろうという専門家も予測を紹介しています。皮肉を言わせていただければ、そのように離婚とそれにまつわる調停や法的手続きの多いアメリカ社会であったればこそ、ファウスト長老もそれによって弁護士時代はかなりの収入を得たのではないのでしょうか。教会幹部となったファウスト長老は、若き日の自分の収入源が多発する現代社会について、今度は憂いのコメントを発する立場になったわけです。

一応、ファウスト長老の説教の中にも以下のような言葉があります。

『離婚を経験した人々も、自己を忘れ、ほかの人々のために奉仕することにより、人生の幸福や充実感を得られる希望や期待をまだ十分に持つことができます。』

的外れなことを言ってる気がしないでもないですが、ファウスト長老としては離婚経験者に精一杯配慮したつもりなのかも知れません。これはモルモン会員の中にも無視できないほどの数の離婚経験者がいるからです。あらゆる事柄を善悪二元論のように語るのが好きなモルモン幹部ですが、離婚については単純に悪いことだと批判することができないデリケートな問題というのがモルモン教会の実情です。

この後ファウスト長老は、「人生のほとんどをかけて、人々の抱えるこれらの問題と取り組んできた結果」、「幾分理解できるように」なったことを語っています。まず「離婚の原因」について彼はこう説明しています。

『利己心や未熟さ、無責任、不十分な意思の疎通、不誠実などの深刻な問題もあります。しかし、わたしは自分自身の経験から、もう一つの理由があると思います。・・・それは、結婚生活を絶えず豊かにしようとする努力の欠如です。』

何というのか、ずい分浅薄な理解だと思ってしまいます。結局ファウスト長老は離婚する者のだらしなさが原因だと言いたいようです。こうした言葉を聞いて、離婚したことがある人はその通りだよ、と言うかも知れません。でも、それは、離婚の原因は当事者にあると言われたら、そうだとするしかないのと同じです。ファウスト長老だけではなくモルモン幹部にはこの手の浅薄な説教が実に多いと思うのです。

健康で長生きするには病気にかからないようにすればいい、病気にかかってしまうのは健康を維持する努力が足りないからだと言えば、確かにそのとおりかも知れませんが。しかしそれが病に苦しむ人の慰めになることはありません。モルモン幹部の話はその程度の内容なのです。この程度の話はキリストの使徒だと自称する人たちが、もったいをつけて語っているのです。

ファウスト長老は結婚生活を豊かにする具体的な方法を提案しています。それは、祈り、信頼、高潔などの習慣を身につけることらしいです。これらの特質は一つ一つは立派なことであり、間違いではないでしょう。しかし、

『毎日欠かさず「愛しています」と語りかけ、夫は妻に「きれいだよ」と言う必要があります。また、時に応じて使う「ごめんなさい」という言葉は夫婦いずれにとっても大切です。』

『結婚後は・・・結婚相手以外の人とのいかなる不審に思われるような交際も慎み、かすかなものであっても悪い

このようなことまで人から言われてなければならないものなのではないでしょうか？
まるで中学生の合宿所に張り出された集団生活のルールを読み上げているかの
ようです。なるほど、それらは末日聖徒と呼ばれる人々にはもっとも必要なも
のなのかも知れませんが。

この後、ファウスト長老は「離婚が増加している理由は、神の戒めを守るこ
とで得られる神聖な祝福が欠けているからだ」と強引に決め付け、
ひょっとしたら今回の大管長会メッセージの核心かもしれない事柄を述べます。
それは、こういうことらしいです。

『わたしは、約20年間にわたるビショップとステーキ会長の
の経験を通じて、什分の一を納めることこそ離婚を防ぐため
のすばらしい防御手段であることを知りました。』

ここは笑うところなのではないでしょうか？ 一体全体、離婚と什分の一献金がどの
ように関係があるのでしょうか？ 結局ファウスト長老の言いたいことは不幸に
なりたくなかったら什分の一を献金せよということなのではないでしょうか？ そんな
疑問に対する回答もないまま、

『偉大な愛のハーモニーを常に奏でる音楽ほどすばらしく
荘厳な音楽があるのでしょうか。二人の声が一つの霊的な歌に
溶け合うとき、それはもっとも完璧な音楽となります。』

・・・と、ファウスト長老の説教はあさつての方角へ飛んで行ってしまいま
した。

今回の大管長会メッセージを読んで感じたのですが、モルモン会員の中でも今
の結婚生活にある程度満足している人にとっては、離婚などは遠い彼方の出来
事なのではないでしょうか。離婚というのは人生最大の不幸で、そうやってはいない自分
たちは神の力で守られているのだと、単純な考え方をしている人はファウスト
長老のバカげたメッセージにも共感できることではないでしょうか。しかしこれほど世の
中で離婚が普通の出来事になってきているのに、離婚は不幸なことです、結婚
生活を維持することが幸福です、といった両極端な価値観を語るだけでは世間
からはますます乖離していくことではないでしょうか。

モルモン教会の会員数が伸び悩んでいる、と言いますか少なくとも私の眼に
は減少しているようにしか見えない状態になっているのには、モルモンの単純
な価値観では現代の日本の若い世代に訴えるものがないからだと思うのです。

口連載 思い出す 私と勇氣と真実の会 (2) るう 会の設立

勇氣と真実の会を設立するため、私たちは總會を開きました。といっても、
会のメンバーは全国に散らばっていましたので、一箇所に集まるわけにも行き
ません。そこでML(メーリングリスト)を活用して、メールの送受信をリア
ルタイムで繰り返して、議事進行しました。当時、インターネットもまだまだ
普及段階で、接続速度も遅く、チャットなどは頼りにならない時代でした。今
思い返しても、こうした方法はなかなか画期的なことだったと思います。

總會では会則と会の役職も決定されました。発足時の組織は、代表に森氏、
定員2名の副代表のうちのひとりには藪内氏が就任し、もうひとつの席は空席と
なりました。実は私を副代表に推薦する話もあったのですが、お断りさせてい
ただきました。その理由はモルモン脱会者で男性ばかりがトップを構成するの
はよくないから、モルモンではなかった人物、あるいは女性を将来的に選任し
ようということでした。この考えは会を離脱するまで変わることはありません
でした。

発足当時の会の組織は以下のとおりでした。代表：1名 副代表：2名(1
名欠員) 地区担当：わたしともう一名 運営委員：2名 会計監査員：1名
。なかなか、しっかりした陣容ですが、実際の活動は自分のできる範囲で無理
しないということで気長に継続して行くことになっていました。

しかし、そうは気長に構えていただけませんでした。それは私たちが想像する
以上にモルモン教団から被害を受ける人たちが多く、相談も殺到したからで
した。その中で一番大きなものが宣教師による女性会員レイプ事件でした。この
件に関しては既に以下のサイトで述べつくされているので、ここでは詳しくは
述べません。

<http://www.interq.or.jp/tokyo/jamnet/>

さて、会はモルモン教や信者に設立を宣言しました。ユニットには郵送。メ
ールアドレスがわかる会員には電子メールで宣言は行われたのですが、内容は
「会の公式サイト」にアップされています。

<http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/htm/decseturitu.htm>

もちろん、教団サイドから返答はありませんでした。しかし、信者からはい
くつかの反応がありました。少し紹介しましょう。それぞれが抜粋です。

その信念に基づいて活動されることに対して、なんら異議を申し立てるもの
ではないことも付け加えておきます。

なお、将来において、私自身の心境の変化や、私の身近なものが関わるかも
知れない出来事の内容によっては、私自身があなたの方の活動に賛成や反対の行
動を起こすことの可能性をも否定するものではないことも併せて表明しておき
ます。

いろいろと私の所属する教会の会員より苦痛を被られた方が多々おられるこ
とは存じております。私もその一人であったこともありますし。今はより良い
人間になろうと必死に努力しております。しかし、最愛の婚約者にさえも時折

苦痛を与えないように常に正しい判断と素直な愛を持って行動するのは非常に難しいことですが、頑張っています。

今日、モルモン教会に関するメールを頂きましたが、たとえ私が教会に関して何か嫌な思いを持ったとしても、自分が選び、信じてきたことについてこのような形で「会」に入会し、非難批判等するつもりは全くないので、今後一切下記のようなメールは必要ないと思いましたが、そのお願いでメールいたしました。よろしくお祈りします。

モルモン教会を脱会された方々がこのように活動を、現在活発に教会へ集う会員にされているということは、皆様が今までに様々な心労があつてのことだろうと思っています。私とは選ぶ道が違うようですが、モルモンも反モルモンも、いつか、仲良く生活できる日がきますよう望んでいます。

これはあなたのお仕事なのですか？（又はボランティア？）教えてください。

。

私は今回このメールをいただいて、このような会が作られなければならないという状況に対して大変悲しくなりました。改めて教会の教えが完全であるのに反して、そこに集う人々が不完全で弱く、靈感を十分に受けずに行動しているのだと分かりました。被害者（その方がそのように自覚されるならば）の皆さんにお詫びしたいと思ひます。そして、脱会希望の方がいらっしやれば、正式な手続きを取っていただきたいと思ひます。そうすれば、少しかもしれないですが、被害が減るのではと。しかし、この会が自らの権利を守る以上に働いて、神の教会を迫害するものとならないようにだけお願いしたいと思ひます。

わざわざ、メールを送ってくださったようですが、わたしは、末日聖徒として誇りを持っています。人間とは不完全なもので、一部の末日聖徒の不用意な行動がこのような会の発足につながっていると言う事を知り、悲しく思ひます。しかし、個人の過ち＝教会の過ちとは思って欲しくありません。日々、努力している人々もいるのです。実際、わたしの周囲の人々はそのような人々が大勢います。わたしは、彼等の模範に、そしてキリストの模範に従っていきたくて固く決意しています。

あなたがどのような思想、考えをお持ちであろうと、貴方の自由であつて、私の関知する所ではありませんが、このようなネットワークを創るなど、愚かな事です。ただちにお止めなさい。近い将来、もっと惨めな思いに囚われる事になるでしょう。恐らく、貴方は謙遜な心を持った事無い、自分は決して間違つた事をしてない、と、思い込んでいる哀れな人だと思ひます。私としては少々、不愉快では有りますが、これは、純粋に、貴方自身の問題であつて、主の教会とそのまともな真面目な教会員には全く関係の無い事だ、と申し上げておきます。

素晴らしい福音に私は心から感謝しています。ぜひもう一度主に祈り求めてください。

貴団体の方々の主張には全く同意できません。私個人の意見ですが、すべての人の選びには責任が伴はずです。私は今までクリスチャンとして、また人として過ちも犯したこともあります。また、お休み会員も経験しました。しかし、教会によって多くのことを学び、少しではありますが成長することができました。人として必要なことを、また、クルスチャンとして必要なことを教会で学びました。この教会と出会つたことに対して神に感謝しています。

モルモン教徒と言うのは何年たつても言うことは同じなのだと思ひさせられます。しかし、今ではそんなモルモンたちのうち何人が現役モルモンでいることでしょう。

資金もない、人数も少ない私たちがここまでやってこれたのは将来にインターネットのおかげでした。この点でも森代表には先見の明がありました。インターネットにはさまざまな便利な点があります。でももし、「一番便利なことは？」と私に尋ねられたら私は即座に「ローコスト」ということを上げるでしょう。以前から私はNGOにも所属していましたが、金銭には四六時中不自由していましたが。たとえば、会報ひとつを出すにしても印刷代、送料がかかってくるわけです。ところが、勇気と真実の会は設立總會からして、MLを使い、その後の情報発信もウェブサイトで言うなど経費面ではかなり楽な運営が可能でした。インターネットの時代がもうすこし遅かつたなら、状況はもっと違つていたものになつたでしょう。

対モルモン教戦略も明確でした。これから先は情報伝達手段として、最速最大のものになるだろうインターネットで、モルモン教の真実を流し続け、盲目的擁護サイトをネット上から駆逐、あるいは無力化するというものでした。森氏が英語に堪能だったこともアメリカの反モルモン情報紹介に役立ちました。私は自らのサイトで日本国内で入手できる日本語資料を中心にモルモン問題を取り上げて行きました。他の会のメンバーもそれぞれのオリジナリティを生かして、モルモン批判のサイトを運営し始めました。

ネット戦略は今では完全に成功したと言って差し支えないでしょう。インターネットで情報を入手することが常識となつた現在、あえて積極的にモルモン

その内容から、モルモン教の発展を妨げているのです。このため、モルモン教団は会員が教団や教義を紹介するサイトの運営を禁じたほどでした。

□おしらせとニュース

●投稿記事募集

脱会体験、モルモンについて思うことなど、なんでもお寄せください。文はプレーンテキストで作成ください。

●高橋弘先生の新著『ユタ州とブリガム・ヤングーアメリカ西部開拓史における暴力・性・宗教』（新教出版社）が出版されました。私もつい先日手にしたところです。皆様もぜひご購入ください。

●高橋先生の「モルモン人物伝」ではこちらの要望で大統領候補ミット・ロムニーを取り上げていただきました。記事の通り、ロムニーが指名を受ける可能性は低いと思われませんが、4月6日の朝日新聞によれば、主な候補が今年1～3月に集めた資金は以下のとおりです。共和党ではブッチ切りの集金力を誇っていますね。高橋先生の記事の裏づけとさせていただきます。

<民主党>

ヒラリー・クリントン上院議員 約2600万ドル

オバマ上院議員 約2500万ドル

エドワーズ元上院議員 約1400万ドル

<共和党>

ロムニー前マサチューセッツ州知事 約2300万ドル

ジュリアーニ前ニューヨーク市長 約1500万ドル

マケイン上院議員 約1250万ドル

★メールマガジンバックナンバーはこちら

<http://garyo.or.tv/mm/tusin.htm>

・発行者	るう@大喜多秀起
・ホームページ	http://garyo.or.tv/
・メールアドレス	ruu_hideki@sky.bbexcite.jp
